

3-1. 十代の性、妊娠、中絶、出産、避妊などに対する意識と行動 若者は望まない妊娠を防ぐためにどのように戦っているか

北村 邦夫 (社) 日本家族計画協会クリニック (東京都)
井口 一成 東京都高校性教育研究会 (東京都)
大田由紀江 (株) 扶桑社 (東京都)

【要約】：積極的に避妊に取り組んでいる若者男女3組を招いて、標記テーマで話し合いを行った。この議論を通して、若い世代の望まない妊娠を防止するために、当事者である彼らに何が必要か、彼らを取り巻く側にある私たち大人が何をしなければならぬかが明らかとなった。

見出し語：日本の若者、確実な避妊、望まない妊娠防止

1. はじめに

確実な避妊法の代表であるピルを使っている3組のカップルにピル使用の動機、セックスについての考え方、現代の性情報をどのように受け取っているかなどについて、インタビューした。3組とも交際期間は3～4年にわたっている。20代前半のカップルで、はじめてのセックスは十代に経験している。

(Aカップルは互いに23歳、大学卒業したばかり、Bカップルは24歳と21歳で大学在学中、Cカップルは互いに21歳、大学在学中で高校時代から知り合っている)

2. 確実な避妊法を選択できたのは？

A子：月経不順なので、セックスするとつぎの月経がくるまで不安でたまらない。彼はそんなに不安ならセックスはしなくていいよと言ってくれるのですが、自分もセックスには関心があったし、信頼している医者に相談してピルを使用するようにしました。

B子：3回中絶したんです。1回は無防備だったので原因がはっきりしてたんですが、2回目はフィルムで失敗、次はコンドームで装着が遅かったらしく失敗してしまいました。その後はコンドームとオギノ式を組み合わせで避妊していましたが、それでも月経前になると、今度は大丈夫かしらと不安でイライラして。そんな時に本を読んで、ピルのことを

知り、クリニックで処方してもらいました。C子：高校生の時一度月経が遅れて妊娠しちゃったんじゃないかとすごく不安になったことがあるんです。その時本を読んでピルのことを知り、月経不順も治ると書いてあったんで、これならいいと思って上京してから使用するようになりました。

使用動機は3組とも、当然ながら妊娠に対するおそれだった。二人は月経不順で、不安な時期を過ごすことが重なった。ひとりは度重なる避妊の失敗を中絶を繰り返していて、確実な避妊法を探していた。共通していたのは、3組とも女性がリードする形で医療機関を訪ねてピルの使用に踏み切っていること。

ではそれに対して男性はどう対応したのだろうか？

A：避妊に関しての確かな情報もなかったし、ピルについても認識不足で、副作用が心配ではじめ反対していました。でも彼女から信頼できる医療機関だと聞き今は安心してます。

B：大学の母子保健学の授業で、ピルとコンドームの比較をして、ピルのよさを知っていたので、彼女が使うのはふたりのためにいいと賛成しました。初期中絶は身体に余り害がないですができれば避けたいです。

C：ピルの知識はありましたが、まわりで使っている人はいないし、友人にもピルは危な

いと言われて、安全性に関して不安でした。ピルを使用すると女性の髭が濃くなるとか、太るとかマイナス情報ばかりが目立っていて、避妊の効果はについての情報は乏しかったですよ。

B以外は半信半疑で、彼女についていった形ようだ。しかし彼らなりにピルの知識を得よう本や雑誌や口込みで研究したり、カップルで話し合ったりしている。しかし、どこからも確かな情報が得られなかった。

3. ピルを使ってみて

B子：すばらしい（笑）。100パーセント避妊できるなんて。月経がくるまでのイライラも嘘のよう。憂鬱になることもまったくなくて、喧嘩も減りました。セックスが楽しくなりました。

C子：自分さえしっかり飲んでいれば大丈夫だから安心です。それまでは妊娠したんじゃないかって、いっしょに落ち込んで、ふたりで不安がってましたから、不安から解放されてよかった。

だいたいこの言葉に収斂されるようだ。そしてそんな彼女たちのようすを見て、パートナーである男性たちも安心して、ピル賛成派になっていった経過があった。

ピルの副作用に関する情報が根強くあること、ピルについて十分な説明をして処方してくれる医療機関が少ないことが、ピルが普及しない要因だと思われる。

注目したいのは、BとCのカップルは、本によってピルを処方してくれる医療機関を知り、訪ねていること。本はやはり貴重な情報源なのだ。

ところで彼らは避妊をどう考えているのだろうか？

C：コンドームは使っていましたが、不安があった。避妊は男にも責任がある。百パーセント女が管理すべきだとは思いません。でもピル使用で安心しましたね。

B：セックスに避妊の責任が伴うのは分かっ

ていましたが中絶はそんなにたいへんなことだと思っていないので、避妊はなおざりでした。

B子：だから私が（避妊）を引き受けましょう（笑）

避妊には男性も責任があると3人とも明言していた。しかし、絶対確実安全な避妊法を彼らはもっていなかった。Bは知識もあったが、中絶について軽視していたから、避妊はおざなりであった。

双方よく話し合っただけでピルを選択したというのはAカップルだった。

A子：女性だけがピルを飲んで避妊するのは不公平だとは思いません。ふたりで相談して、ピルを決めたのは自分たちですから。

ピルは女性がセックスをしたいが、避妊も確実にしたいという強い気持ちで選択されている。でもふたりで相談して安全で確実な避妊を選択したという気持ち、不公平感や被害者意識をもちにすませるようだ。あくまで男性が避妊に責任を感じ、話し合っただけで選択することが大切だ。

4. 二人の関係

避妊法について話し合っただけでピルを選択したカップルは性的にも平等だった。

B：彼女がセックスしたくない時は分かりません。眠そうとか。そんな時は無理じいはしませんね。

どちらかがしたくない時はしない。

「彼がセックスしたいと言っているが、私はまだしたくない。でもセックスしないと彼が離れてしまいそうだ」というティーンの悩みに対して、彼女たちはきっぱりこう答えた。

C子：その子はその男性を好きじゃないんだと思う。好きなら触れてみたいと思うものでしょ。

A子とB子：うなづく。

Aカップルは会うとだいたいセックスするが、それはふたりの感情の自然な高まりだと言う。B子もセックスの欲求ははじめからあったと認めた。十代の時から、女性にも性的欲望ははっきりある。彼女たちも欲望があつて、その欲望に忠実にふるまっていることが分かった。

5. セックス観

Cカップルは高校時代からAとBカップルは大学時代にセックスをした。女性は3人もファーストセックスで、現在Bカップルは同棲中。

A子：始めから彼が好きだったんだけど、彼も同じ気持ちだとなかなか分からなくて分かった時は、もう爆発してしまいました。

A：自然でした。

ファーストラブとファーストセックスが一致しているのがAカップル。ふたりともアーティスト志望でわが道を行くタイプ。情報にふりまわされていない。性と愛が一致している。

まだ結婚や出産は考えられないが、愛し合っているので真剣に避妊も検討した。

B子：ヴァージンを捨てててしまいたかった(笑)。セックスしたかった。今は同棲してて安定してます。

B：僕は地方出身なんですけど、地方のほうがセックスは乱れてましたね。高校時代、妊娠させちゃった友人は仲間の誇りというか、ヒーローでしたね。僕も中絶カンパするのはやぶさかではなかったですよ。セックスばかり考えていた高校時代は、今振り返ると、暗くてドロドロしてて健康的ではなかったですね。

セックスは未成年にはタブー視されている一方で、仲間ではセックスしてないのは一人前ではない見方もあつて、その矛盾に揺れている。

Bは高校時代はセックスできるチャンスさえあればしていたそう。相手は誰でもよか

った。だが今は違う。同棲中で性的にも情緒的にも安定している。ふたりは避妊や性病について話し合っている。カップルであることは男性にも安心感や思いやりを生むものなのだ。

C子：ヴァージンでいることが恥ずかしいみたいな気持ち、高校時代にありました。知っている人がセックスしたと聞くと、エッなんて遠ざかっちゃいました。

C：中学の時はしたって話し聞いたことあるけど身近じゃなかった。高校の時はポツポツやっているみたいだったけど身近じゃなかった。暴走したらこわかった。でも、彼女ができてから、したいなと思いましたね。

知りたいけど知りたくない気分。経験しないと恥ずかしいという気分も、男女問わずかなり一般的。Cカップルはどちらかと言うと理詰めタイプで、友達感覚が強いが、ロマンチストでもある。相手ができてセックスに強く興味をもち、セックスして、避妊の知識も共有できた希少なカップルである。

しかし、現実にはBカップルのようにセックスに関する興味、好奇心が先行して、相手かまわずになりがちである。かんじんの正しい性知識も、まして避妊知識もないまま、後ろめたい気分でセックスしているのが十代の多くの姿ではないだろうか。

正しい性情報も必要だが、異性と情緒的に安定したコミュニケーションができて、愛情を育くめるような環境が必要だと3組の話から分かる。

6. 親たちの反応

A子：ピルが見つかって母に問い詰められました。母は強硬にやめなさいと言いましたが、ある日新聞記事でピルの安全性や使用方法などを読んで安心したようです。娘の言うことより新聞記事のほうを信用するんです(笑)。

正しい避妊知識は、じつは親のほうも持っていない。あやふやなまま非難したり怒ったり、あるいは無視したり見過ごしたりしてい

る。6人のなかで、娘がセックスしている事実をともかく認知しているのはA子の母だけだった。そしてA子の母にもピルの知識はなかった。新聞記事など一般に信頼できるメディアで広報することは必要だ。

B子：母は（同棲していることを）知らないかもしれない。この間も上京して私の部屋（つまり同棲中の部屋）で、私に「おにちゃんとおにちゃんの恋人はセックスしているのかしら」なんて聞くんですよ。

B：いや、君のお母さんは（僕たちがセックスしていることを）知っていると思う。会った時に分かっていると感じたことがあるもの。

B子：そうかな。信じたくないのかもしれない。

B：僕の親は知っていると思う。そのことで話し合ったことはないけど。僕が家事しなくて勉強に専念できるから（同棲は）よかったと思っているんじゃないかな。

B子の母が上京してくる時は、Bは友達宅のところに行くという。同棲していることは伝えていないが、双方の親には会っていて、ふたりは容認されている。でも、双方の親とも、ふたりがセックスしているとか同棲している事実を認めていないというか知らないふりをし続けている。セックスしていることは不透明なままだ。このことはCカップルの親の対応も似ている。

C：ふたりがつきあっていることは両方の親も知っている。でもセックスしているなんて信じたくないんじゃないかな。父親はうーん、セックスしてるの知ってるけど、触れたくない感じかな。学生がセックスすることについては僕はいいとも悪いとも言えない。ふたりの問題でしょう。親だったら心配するのはしようがないと思う。

C子：早まったことしないでねと母に言われたこともあります。

ふたりが親密な関係だと知っている。家にも出入りしている。それでも、ふたりがセックスしていることはあえて知らないふりをしている。

もつともA子の父親は絶対認めようとしな

い。

A子：母から父に私がピル使っていることは伝わっていません。そんなこと分かったら、彼の家に怒鳴り込みにいきかねない。父はもともと気があわなくてぶつかることが多かったですね。ひとり暮らし始めるのさえ、猛反対でたいへん。認めるまで長い道のりでした。

A：親は子どもは勉強するのが仕事と思っているから、将来に役立たないセックスや恋愛は遊びとしてしかみてないんじゃないかな。まして十代だと認めないでしょう。

親も子が交際していることまでは認めているし、多分相手に好感も抱いている。でもセックスの話はしない。

子どもたちはセックスに関して、親から適切な助言も、情報も与えられないまま自分たちで手探りで、出産も結婚もしないが、カップルとして安定している関係を創造しなければならぬのだ。

7. 情報と友人

C：僕たちがピルを使用していることを知って、避妊やセックスの相談してくる友人はいますね。でもピルを飲んで、誰とでもセックスしようと考えているようなのには教えない（笑）。

ふたりの関係を安定させ、安心してセックスできるようにピルを使用するのはいい。だがフリーセックスのために使用するはダメ。そんな潔癖な倫理観がのぞいた。

それにしても、正しい情報がないために、少しでも詳しそうな友人を頼って性情報を得ようとしているようすがうかがえる。

A：学校教育で性をとりあげたら信用できたと思う。

B：ポパイとかを読んで知識を得た。むしろ学校で配布する性知識の情報は信用できなかった。僕は担任と性について話せたらよかつ

たと思った。性は個人差が大きいから個別指導しかないと思う。一括して教えると、助長したり刺激したりしてしまう。

B子：先生はセックスについて話すのはいやじゃないかな。聞きたがらないと思う。個別相談してくれるカウンセラー室を設けたほうがいい。

C：学生のうちはセックスしないが前提だから、教科書はあっても役に立たない。性病とか教えないでしょう。コンドームの使い方や買い方、薬局でフィルムは買えるのか射精したあとどうするのか、そういうことは噂で知った。でも先生がセックスするなど言うのは仕方がない。高校生は隠れてセックスするしかない。セックスするためにホテルに行くお金は、小遣いから出している。小遣いはどう使おうと自由じゃないかな。

考察

セックスに関する情報は巷にあふれているのに、正しい避妊知識はどこにもないというのは共通の訴えだった。

情報は友人たちの噂がもっとも頼りになる。

だが、彼らは学校や親が性や避妊について教えるべきだとは必ずしも思っていない。そもそも学校や親が学生のうちはセックスすべきではないと暗黙のうちに禁止していることを、むしろ認めている。

緊密なコミュニケーションによって、ふたりの関係を築いてきた彼らは、野放図なフリーセックスに懐疑的だ。みんながピルを飲んで、自由に誰とでもセックスすることに反対の気配。

お互いに好きだと感じ、触れたい、セックスしたいという気持ちが芽生えたときに、性や避妊の正しい知識があるといいと感じている。

また親や教師が性教育にふさわしいと思っていない。ちょっと無理ではないかという意見に傾いていた。

しかも、現在の親や教師は性を一方的にタブー視したり抑圧したりしていない。彼らはセックスに罪悪感はもっていなかった。好きになったらセックスするのは自然だという感覚が育っている。どうやら必要なのは、必要

になったときに、正しい情報が載っているテキストを手に入れることができることだ。図書館やカウンセラー室に常備されているのもいい。

また避妊の知識を与えてくれると同時に精神的なアドバイスもできるカウンセラーが地域か学校にいたることが望ましいようだ。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【要約】:積極的に避妊に取り組んでいる若者男女 3 組を招いて、標記テーマで話し合いを行った。この議論を通して、若い世代の望まない妊娠を防止するために、当事者である彼らに何が必要か、彼らを取り巻く側にある私たち大人が何をしなければならないかが明らかとなった。